

巻頭言 走れ、チェス！

私が小学校に上がる前後だったか、テレビ番組に「走れチェス」という、アメリカのホームドラマがあった。私はこれが好きで、毎週テレビにかじりついて見ていた。一種の動物愛情物語で、飛び飛びにしか覚えていないが、こんなストーリーだったように記憶している。

あるアメリカの牧場に、一頭のサラブレッドが生まれた。仔馬はチェスと名づけられ、牧場主の娘ベルベットが養育をまかされる。以後は、主人公の家族や友人関係のできごと、チェスがかかった恐ろしい伝染病とベルベットの懸命の看護、などのエピソードを交えながら、物語は展開する。ベルベットのそそぐ深い愛情のもと、仔馬は成長を続け、やがて競走馬としてたぐいまれな才能を発揮し始める。自分より少し年上の少女がサラブレッドにまたがり、さっそうと駆ける姿は、幼な心にも心躍らせる光景だった。

そして最終回、全米の名馬が集結する大レースにチェスが登場する場面をもって、ドラマはクライマックスを迎える。ゲートが開き、各馬一斉にスタート。しかしチェスは出遅れ、苦しい展開である。後半、かたずをのんで見守っていたベルベットは、やおら立ち上がり、一気に階段を駆け上がって行った。そしてそのままアナウンサーに飛び込み、啞然とする係員を尻目に、マイクを握りしめて絶叫する。「チェス、がんばって。走れ、チェス！」スタジアムに響き渡る飼い主の声援を背に、チェスは猛然とダッシュ。先を行く馬を次々に追い越し、ついに一着でゴールラインを走り抜けるのだった。

今でもはっきりと覚えているくらいだから、子どもながらよほど感動したのだろう。しかしこの年になって振り返ると、残念なことではあるが、思い出に「大人の分別」のようなものが紛れ込んでくることは避けがたい。つまり、こういうことは起こらないだろうなあ、と思ってしまうのである。実際にこうなるとすると、たぶんチェスの1着は取り消される。ドラマを見ていると、この飼い主と馬のペアだけに感情移入し、こういうことも許されていいのではないかと思えてくる。しかしほかの馬にも飼い主がいて、馬を育てる苦労もあったであろう。同じことをすべての馬にやっとなれば、レースは大混乱である。観客席にマイクを持ち込んで声援を送ったり、逆に大音響で妨害したりとなっては競馬は成り立たない。そもそも、勝手にアナウンサールームに入り込むのは、住居不法侵入。しかも個人的利益が目的であり、認められるはずもない。

当時は今よりはるかにアバウトな時代であった。だからテレビドラマでこういうストーリーが描かれても、荒唐無稽という感じはしなかったはずである。1960年ごろといえば、終戦とその後の混乱から、十数年しかたっていない。日本の戦後は、酒に

有毒なメチルアルコールをまぜたり、砂利の入った缶詰を売るなど、なんでもありのデタラメな時代である。今、中国が海賊版だ有害食品だといって眉をひそめているが、日本もかつてはそうだった。そして今の中国が元気であるように、そのころの日本にも活気があった。中国も諸外国からの批判を意識して、徐々に制度化を進めて行くだろうが、それに並行して経済的活性も失われてゆくことが予想できる。社会が安定するとともに細かい所まで法整備が進み、様々なことが規格化される。それによって、ある面で生活しやすくなると同時に、いつの間にか全体的な活力が失われてゆく。私が石垣島に住んでいた時、街の中心に新設間もない小奇麗な市場があったが、客はほとんどなく、閑散としていた。島の人たちに聞くと、以前の市場はごちゃごちゃしてきたなかったが、客で賑わい、活気があったという。そしてこれは、経済活動だけの話ではない。

昔の生態学の論文は、当時の社会を反映したわけでもなからうが、今よりはるかにルーズであった。研究者の興味次第で自由に書き、英語などお世辞にも上手とは言えない。それでも内容的には面白いものが多くあった。それが時代を下るにつれて規格化が進み、統計処理の厳密さや仮説検証スタイルの順守を求められ、英語の要求レベルも上がり、どんどん窮屈になっていった。知り合いの考古学者は、「最近の生態学は統計学になってしまった」と嘆き、こうして他分野からのアクセスも困難になりつつある。個人の権利を守るため、経済活動に法整備が必要であったように、学問の規格化にも正当な理由はあるだろう。しかし「正しいこと」を積み重ねて行った結果として、別の大切なものが失われてゆく現実を、どう捉えるべきなのか。

「走れチェス」は、英語の原名 **National Velvet**。画像のいくつかは、今ではインターネットの **YouTube** で見ることができる。最近検索してみたが、50年ぶりの番組との再会に感慨深いものがあった。

放映から半世紀。「走れチェス」は、もはや復活不能なアバウトな時代へのレクイエムにすぎないのか。そんな疑念をまといながらも、ラストシーンのあの型破りな美しさは、今も私の心の中で輝いている。

< S >